

オーストラリア国立大学における One Year Intensive Course — 20年後のアンケート報告 —

早川 治子

1978年にオーストラリア、キャンベラのオーストラリア国立大学で社会人のみを対象とした1年間の集中日本語講座(One Year Intensive Course)が行われた。1月から10月までをオーストラリア国立大学で、最後の2ヶ月は日本でというコースであった。これは1978年から1980年まで3回連続して行われ、私は第1回目に講師として参加した。1998年4月にオーストラリア国立大学で1978年度の同窓会が20年ぶりにあり、その際、学生たちにアンケート調査を行った。学生たちがこのコースに参加したことを20年後の今どのように考えているかを知りたかったからである。その概要を報告する。

1978年当時、オーストラリアドルは1ドル280円だった。(現在は60円台である。) シドニーへの往復切符は50万円以上したと思う。オーストラリアへ教えに行くと言ったときの私のアメリカ人学生の反応は「あそこは囚人の国ですよ。」というものだった。私とてたいした知識も持ち合わせず、浮かんできたのは悪名高き白豪主義とカンガルーというありさまであった。

1977年の確か12月17日シドニー空港に着き、クリスマスも近いというのに週末で閑散とした紙屑の舞う繁華街を抜けて、シドニーハーバーまで下り、そこで、ハーバークルーズというのをやってみた。オーストラリア名物のブッシュファイア(山火事)の煙がそこここに白く立ち上っていた。そこで得た私のオーストラリアの第一印象は「何と恵まれた国だろう。」というものであった。この印象は今でも変わらない。澄んだ水、深い緑の中に点在する家々、それらの家から海まで続くプライベートの階段、ヨット遊びに興じる若い家族。人々は町にはではなく、海にいたのだった。それらは波の反射と相

まって、光り輝く、キラキラとした印象を残した。一年前まで滞在していたベトナム戦争直後の荒廃したアメリカと比べて、それは健康そのものであった。

インテンシブ・コースは、シドニーから飛行機で1時間ほどのキャンベラの当時オーストラリア唯一の国立大学、オーストラリア国立大学で行われた。この大学は学部教育のみならず、大学院教育、研究機関としての位置づけの大きい大学であった。キャンベラは、バーリー・グリフィン湖という人工湖を造り、その周りに計画的に町並みを配した人工都市である。大使館、議会、そして大学のために造られたような町で、市内に工場を造ることも許されていなかった。ただひたすら清潔で、静かな、勉学にはこの上ない環境であった。この大学のアルフォンソ教授の発案で日本語を話せる人材、特にビジネス面での人材を育成するため、豪日基金、国際交流基金の援助により、一年の集中コースが作られ、全国から学生が集まったのだった。

以下インテンシブ・コースがどのような意味があったのかを学生のアンケート結果の紹介も交えて、考えて行きたい。

・オーストラリアと日本語教育

オリンピックの開会式で聖火の点灯者にオーストラリア大陸の原住民アボリジニー出身者が選ばれたことからわかるように、この国の原住民はアボリジニーと呼ばれる人々である。また様々な国からの移民による多文化の国である。これらの移民に話される言語はコミュニティ言語と呼ばれ、現在約180あり、多言語の国でもある。現在、オーストラリアという国は多文化・多言語そのものに国のアイデンティティを模索しているように見える。但し、日本語はこれらのコミュニティ言語、つまり移民または移民の子孫の文化的バックグラウンドとなる言語という位置づけはまだ薄く、研究者のための言語、貿易相手国の言語という側面が強い。

日本語教育が最初に始められたのは、1917年、シドニー大学においてであった。その後40年以上たって、1962年にオーストラリア国立大学で、1965年

にクイーンズランド大学とメルボルン大学で始められ、1967年にはモナシュ大学でも始められた。1976年までには17の大学レベルの上級教育機関、100以上の学校で教えられている。1950年代から1960年代前半の日本語教育は主に日本学者の養成であり、オーストラリアの日本研究の礎となる人々が輩出した。その後、1960年後半から1970年前半にかけて、第1次ツナミ現象と呼ばれる学生数の増加が起こった。この時期はオーストラリアが大きくアジアへ目を向けた時期である。1973年にウィットラム政権の「多文化主義」の提唱があり、オーストラリアは白豪主義から多文化主義へ大きく方向転換を行った。イギリスの流刑地から植民地そして連邦国家へと発展してきたオーストラリアは、今でもあきれるほどイギリスへの従属意識、あこがれが人々の間に強い国ではあるが、地理的に見れば、アジアの南に位置し、政治的に見れば、白豪主義を捨て、多文化主義、そして経済的に見れば、アジアの一員として経済活動を維持するという大きな方向転換せざるをえなかった時期なのである。しかしながらこの時期日本語を使って仕事ができる社会人はほんの一握りの人々であり、そのような人々の養成を目的としてこのコースが設けられたのである。今回の訪問で学生に聞いてみると、当時の人々の認識としては「あころ日本語を勉強しようなどどいう者はめったにいなかったし、日本がこんなに経済発展をしようとは思ってもみなかった。」とのことであった。自分のキャリアの中に日本を入れようとする者はまだまだ少数派であった時代である。

・インテンシブ・コースの概要

1978年の朝日新聞夕刊には「モテます日本語・豪の大学」という見出しで以下のように要領よく概要が説明してあるのでそれを引用する。

世界でもユニークな一年間集中講義方式の日本語講座が1月から、豪・キャンベラのオーストラリア国立大学で始まった。会社社長から高校卒の若者まで、23人が第1期生で、年間900時間の集中講義で、日本語がしゃべれるよう特訓を

する。豪日財団とわが国の国際交流基金が協力して初めて開講したもので、月謝はタダ、最後の2カ月は、東京留学で仕上げをする。一中略—人口当たりの“日本語使い”では米国を上回る世界一の日本語熱のオーストラリアだが、まだ数年間の実績しかなく、日本語を上手に話せる人は多くない。そこでことしから外交官、公務員、ビジネスマンなど社会人を対象にした1年間集中教育方式を採用した。

このコースは同大学のアルフォンソ教授の発案になるものであり、アルフォンソのLANGUAGE PATTERNが最初のテキストとして用いられた。教員は主任教授を含め4人のチームでスタートし、すべて日本人、そのうち3人はアメリカ、日本から招聘された者であった。

朝9時から5時まででティータイムとランチ以外は講義、チュートリアル、L. L.のルーティーンを1日2回週5回繰り返す、4週目に1週間の休みというカリキュラムであった。のんびりとしたオーストラリア人にはこのコースはまさにインテンシブ以上のものであったらしい。コース中、学生の間から盛んにナーバスブレイクダウンという言葉聞いた。プツン、つまりあまりに大変なのでよくキレていたらしい。しかし、午前、午後30分ずつのティールームでのお茶の時間、ランチタイムにはワインを、というのんびりさであった。私たち講師陣も朝から夕方までの授業以外にも、夜遅くまで授業準備の追われた。当たり前といえば当たり前のことなのではあるが、これを見た大学の人々の間では主任教授は講師を奴隷のように使っているという噂が飛んだものであった。しかし、週末にはテニス、ビーチ、バーベキューパーティーとまさにオーストラリア的な日々であった。学生たちは最後の2カ月は東京でホームステイをしつつ、上智大学を借りて、日本語学習を続け、仕上げをした。コースを終了した学生にはオーストラリア国立大学の日本語課程の学生と同等の資格が与えられた。

会社員、公務員は1年間有給で仕事を休んで参加した。学生であった者も奨学金を得ていた。授業そのものはタダであったから、ほとんどの者が経済

的な心配はなかった。学生は記事にもあるとおり、日本と関係のある企業、省庁の者、これから日本関係の仕事につきたい、または日本研究者を目指している者、日本語教員といった社会人であった。ユニークなところでは多治見で陶器の勉強をしたいという陶芸家、日本へ布教に行く神父などもいた。

・アンケートの概要

同窓会に集まった学生たちにアンケートに答えてもらった。

当初23人であった学生は途中で2名が他の専攻に移り、住所不明の者もいて、計16名にアンケートを出し、そのうち11人から回答を得た。以下回答及びわたしが個人的に得た情報に基づいてみていく。

コース前及びコース後の日本語の勉強について

21名中13名が全くの初心者であった。コース後自主的に引き続いて1年以上の日本語の勉強を続けた者はアンケート結果によると11名中9名であった。コースの長さ、内容についてはすべての者が満足しており、その後の勉強の基礎ができたという答えが多数あった。

コースを受けた年齢について

受講者の年齢は17歳から53歳まで幅広く、アンケート結果によると、10代が1名、20代が4名、30代が4名、40代1名、50代1名であった。新しく外国語を学ぶのには年齢的にかなり高い者もいたが、かれらはほとんど自分の学んだ年齢に対して肯定的であった。しかし40代と30代の2名の者がより若いときに学んでいればと答えている。教師の立場から見ると学習の速度、修得する正確さにおいては、やはり年齢の若い者の方が速く、現在話す日本語の正確さにおいても勝っている。しかし、その後の日本滞在期間の長さ、日本語、日本に対する熱意においては年齢の高い者の方が勝っていたという印象を受けた。特に40代の者1名、50代の者1名はその後、自費で10年近く日本に滞在している。

コース以前の仕事について

コース以前の仕事としては、学部に入る以前の学生、大学院の博士課程に入る以前の学生、弁護士、大学教授、エンジニア、高校教師、警察官、神学生、公務員、陶芸家、会社社長、船会社社員、海軍軍人と多彩であった。コース直後來日が決定している者は8名であった。

コース以後の仕事と日本語との関係について

その後21名中18名が日本関係の仕事に就いている。日本関係の弁護士が2名、省庁の派遣として滞在した者が5名、会社員として滞在した者が2名、日本語教師をしている者が3名、日本で英語教師になった者が1名、日本で布教に従事している者が2名、陶芸家が1名、地方都市の国際交流課に勤めた者が1名となっている。コース直後來日が決定している者は半数に満たなかったのであるが、その後何らかの形で日本語を生かして、来日の機会を得たことがわかる。中にはニューサウスウェールズ州の日本語カリキュラム開発に携わっている者、オーストラリア財務省の高官、ヴィクトリア州の東京事務局長、敦賀、福井で布教し、アジア地区の管区長になった者、武蔵野の桜町病院で尼僧になっている者、淡路島の津名町で国際交流課に勤め、地震の際に、元警官であった経験を生かして活躍した者もいる。そのうち、1～5年の滞在が12名、6～10年の滞在が3名、11～20年の滞在が3名であった。すべて仕事と関連して来日している。

日本語を勉強して生活が変わったかという質問にたいして

仕事に使っているという答えのほかに、ほとんどの学生が子供がいれば、子供に、いなければ、甥や姪が日本語を勉強している。または日本語で子供に本を読んだり、日本関連のニュースに関心を持っている。

このコースを教えている最中に気づいた特徴的なことは、かれらが日本の経済的な発展に気をとられ、日本文化にあまり興味を示さないことだった。今回の回答で多かったのは、日本文化に対する興味である。「日本が自分の中に生きている」、「日本に郷愁を感じる」という答えが散見し、20年とい

う長い時間をかけて、日本が彼らの中に同化していつているという印象を受けた。

また、日本語を学んだことが、彼らのキャリア上プラスになっていることは確かではあるが、日本、日本語がすべてということではない。彼らの持っている多数のカード（選択肢）の中に日本語があり、ある時は日本語と他のものを組み合わせて、又、ある時は日本語を捨てて、自分の道を決定している。

最後にアンケートの中にある印象的な答えをそれらの人々のプロフィールとともに2、3引用したい。

Bさん

彼女は53歳で日本語を勉強を始め、多治見に行こうと考えた。それ以前にも彼女は陶芸家として、認められていたのだが、多治見で修行するためには日本語が必須であった。師と仰ぐ人は英語ができなかった。53歳の年齢のため語学習の速度は速くなかった。また彼女は「17歳の男の子と一緒に勉強したのよ。」とよく述懐する。芸術家で繊細な彼女の神経には多々辛い面もあったようだが、その後もシドニー大学で日本語を続け、コース直後の79年、そして1985年～1991年に多治見に滞在している。

「自分が熟年であったことがよかった。子供たちが巣立ち、夫が自分の不自由を知りつつ、コースを続けることを励ましてくれた。」

「日本は私が世界中で一番好きなところであり、日本語と日本に対する理解は私を独自の陶器の世界へ導いてくれた。もし日本語が話せなかったら、その世界の扉は閉められたままであったと思う。」

「日本を知ることによって、私の生活、ライフスタイル、外見までもが変わってしまった。」

「こんなすてきな冒険ができたことをとても感謝している。」と彼女は書いている。

同窓会の1年のちに彼女に多治見に招待してもらったのであるが、町を歩くとそこここから声がかかる。彼女は陶芸の本の翻訳まで成し遂げている。

Dさん

彼は警官であり、コース以前には大平首相のオーストラリア訪問の際に護衛を勤めたり、寄港した日本漁船の乗組員が、船内でいざこざを起こしたときに、取り調べに当たっている。コース後もウィットラム首相の護衛として来日している。その後淡路島で国際交流課に勤め、神戸の大地震と時は救援活動に当たっている。現在は京都のホテルで外国人の案内係をしている。

「インテンシブ・コースに入った目的はオーストラリア政府の警察官として、東京に派遣されるためであったが、政府がその派遣を取りやめてから一層日本へ行きたくなった。」

そのため彼はいろいろなつてを頼って、前述のような仕事をさがして来日し、現在も日本語の学習を続けている。

Lさん

彼は弁護士であり、コース以前に中国語を修得していた。コース後すぐ韓国へ行き、現在は韓国、中国の顧客が多いため、日本語はほとんど使っていない。彼のキャリア上、日本語の学習はほとんどプラスにはならなかった。しかし彼は今も日本のニュースに注目し、子供に日本語を学習させている。

「私はタウンズヴィルを日本が爆撃したのを覚えている。1940年代には日本を嫌うように教え込まれた。しかし、実際、日本を見、学ぶことによって、私は日本という国に尊敬の念を抱いている。」

オーストラリアには特に高年齢の人々の中には未だ敵国としての日本の存在があり、それを感じるときもままある。日本語学習は彼のキャリアの上ではプラスにはならなかったが、日本に好意を抱く人を一人増やしたとは言えるであろう。

このコースは予算の関係と当初の目論見であるビジネス界からの参加が少なくなったため3年で打ち切られたが、社会人のため、特に年齢層の高い人々のための集中コースという意味ではそれらの人々の動機づけの高さ故に実りあるものであったと思う。何歳になっても思い立てば自分の好きなこと

ができる国、またそれを受け入れる国民性、オーストラリアという国でなければできなかったコースであろう。

(はやかわ はるこ)